

聞くこと

六年 Y・I

夏休みの終わりに、私たち六年生は、二泊三日で修養会へ行きました。一学期の終わりに、修養会のプログラムを見た私は、予想以上にお話を聞く時間が多く、正直なところ、修養会を楽しみには思えませんでした。実際、夏休みを終えたとき、久しぶりに恵泉の友達と会うのはとても楽しみでしたが、修養会に対しては、億劫である気持ちの方が大きかったように思います。

しかし実際に行ってみると私のイメージは覆されてしまいました。礼拝や講演など、修養会での先生方のお話は、学校で聞く普段のお話とは一味違いました。校長先生は、ご自分のこれまでの人生について、そして息子さんについて話してくださいました。息子さんのことで思い悩んでいた時期があったこと。そして息子さんのことを本当に大切に思っていらっしゃることが伝わるお話でした。「最後に愛は勝つ」と言い切り、息子さんのことを思い浮かべながら話すそのお姿は、普段の数学の先生の姿ではなく、一人の父親の姿でした。S先生は、音楽の世界へ進む中での葛藤や苦悩、そしてキリスト教との出会いについて話してくださいました。普段の授業だけでは絶対に知ることはできないS先生を知ることができた気がします。K先生は、不安に思っていることや、友人や仲間のおりがたさについて話してくださいました。私は四年生の時の担任がK先生で、堂々と私たち生徒の前に立ち、迷いなく指導をしてくださっている印象があったので、不安に思うことや、思い悩むことがあると聞いたとき、とても意外でした。しかしそれと同時に、私は先生が学校で、私たちに見せている先生としての側面を、その人の全てだと思い込んでいたことに気付かされました。この様に先生方がご自分のことを包み隠さずに語ってくださることによって、思ってもみなかった新たな一面を知り、私は「先生」の話ではなく、ひとりの「人間」の話の聞いているように感じ、そして、これが修養会なのだ実感しました。

二日間にわたって行われたディスカッションは、「自分像」「家族」「友」「価値観」「大人」「壁」「変化」という七つのテーマに分かれて話し合いをしました。私は「自分像」を選択し、自分らしさとは何かということや、なりたい自分像について同じグループの人と話し合いました。特別に仲の良い人達が集まっているというグループではないので、ディスカッションを行う前には、深い内容

に踏み込んだ話は出来ないのではないかと感じていました。しかし、いざやってみると、思っていたよりも遥かに深いディスカッションが出来たように思います。同じグループの人達の特徴や印象を述べて「他己紹介」をする時も、案外すらすらと相手の印象などをあげることができましたし、みんなが言ってくれた私の印象も素直にすんなりと受け入れることができました。あまり意識をしていませんでしたが、思っていたよりも友人たちは私のことを見てくれたし、私も友人たちのことを見ていたのだということに気付かされました。このディスカッションで、真剣に他者や自分に向きあうことによって、自分自身についても、また他者についても、それまで気付かなかった一面を知ることができ、ここで一つ今回の修養会の目的を果たせたように感じました。

三日目に行われたクラスの感想会は、とても重い雰囲気でした。しかしその重い雰囲気というのは、決して暗く、憂鬱なものではなく、上手く言葉にはできませんが、あえて言うなら、手ごたえのある充実した時間でした。修養会の感想や自分が現在考えていること、そして将来のことなど、クラスメイトに伝えたいと思うことが各々述べるのですが、話が進むうちに、皆、普段にはない集中力を発揮し、クラスがひとつにまとまっていくようでした。そこでは普段は自分のことを話さない友人が自分自身のことを話してくれたり、ひょうきんでいつもクラスを明るくする雰囲気にしてくれる友人が、辛かった経験や深みのある考えを話してくれたりしました。感想会は、四年生のときのオリエンテーションキャンプでのクラスの話しあいとは違います。一年生から四年生のクラスと五、六年生のクラスは違うからです。そこには卒業間近の時間、それも二年間を共に過ごすことで築かれる絆が確かにあります。毎日同じ時間を共有することで、地道に築かれた絆が、この人たちに自ら自分のことを話せる、受け入れてくれるという信頼に繋がり、このような有意義な感想会を作り上げたのだと思います。私は、自分の心のうちを打ち明けられる仲間がいること、そして心の内を打ち明けてくれる仲間がいることをたまらなくうれしく思います。

今回の修養会では先生方のお話でも、ディスカッションでも、感想会でも、人の心に触れることが多くありました。自分の心の内をさらけ出し、言葉にして伝えるということは大変勇気がいることです。誤解が生じないように正確に、しかし相手の心の内を慮りながら伝えるにはエネルギーをも必要をします。しかし、それは話す側だけのことではありません。感想会では、ひとりの友人が

話し始めると、自然と皆が真剣になって聞き始めました。ディスカッションや感想会、また、修養会全体が終わったとき、体力的に疲れることは何もしてないのにも関わらず、私はどっと疲れを感じました。つまり、聞く側も話す側と同じくらいの、もしくはそれ以上の勇気とエネルギーを必要とするということです。ただの好奇心だけでその人の話を聞くべきではなく、生半可な気持ちで人の心に触れることほど失礼なことはありません。相手が本気で話しているにも関わらず、聞く側がその返答を綺麗事で済ませたり、無責任に励ましたりすることはかえって相手を傷つけます。相手の話を真剣に受け止める覚悟がないのなら、聞かない方がましです。本気で話している人が相手に求めているのは、綺麗事でも、その場しのぎの慰めでもなければ、的確な助言でもありません。それは多分、勇気をもって本気で話す人の話を、自分は受け止める覚悟があるということを示すことだと思います。上手く言葉に表せなくても、上手く態度に出せなくても、その意思を示せば、必ずそれは相手に伝わります。そしてそれは、話す側の人にとって、とても嬉しいことであり、安心できることです。信頼関係というものは、そのようにして出来上がっていくものなのかもしれません。

そう考えると、多くの後悔が生まれます。私には、小学校からの親しい友人で、この夏、ダイエットをし過ぎたあまりに、拒食症になったあげく、うつ病になってしまった友人がいます。そのことを別の友人から聞いたとき、私は急いでその友人に会いに行きました。その友人のそばで、直接話を聞いてあげたい一心で、向かいました。しかし実際に友人に会い、信じられないくらい痩せ細った彼女の姿を見て、私は言葉を失い、彼女の不安や恐怖を聞いてあげることでもできず、力になりたいという気持ちも伝えられず、当たり障りのない会話をするしかできませんでした。受験勉強で忙しいのに、来てくれてありがとうと力なく笑った彼女を見て、私は自分の無力さを痛感しました。私には、病気である彼女を受け入れ、話を聞く勇気などなかったのです。勇気もないのに彼女の心に触れようとしたのです。

このような自分の行動を深く後悔していますが、修養会を終えた今、あの頃の自分とは違うと言い切れます。会話がなければ、日常会話は成り立ちません。物心がついた頃から、「聞くこと」と「話すこと」をしてきましたが、今回、誠実に語られる話に、真摯に向き合う体験をし、「聞くこと」の新たな一面に出会うことができました。その意味や重要性に気付くことで、私は以前よりも少し

大人になれた気がします。当たり前だからこそ、気付きにくいのだと思いますが、聞くことと同じように、話すことや考えること、感じることにまた、自分がまだ気付いていない、しかし看過してはならない側面があるのだと思います。これから日々過ごしていく中で私は、物事に対して、多角的に、柔軟に向き合う姿勢を大切にして、成長していきたいと思います。